

つたのである。

冷静に読めば矛盾が目につくが、義太夫が語り、それを耳で受けとると、いう浄瑠璃の観賞態度、それに筋が通つた物語というより、場面／＼を重視した脚色であること等から、決して看客は不満足ではなかつたろうと思われる。

事件の解決も、下の巻も、はや半ば過ぎの頃それも清十郎の自害後、ようやくそのきざしが現われ始める。それまでお夏との対面を描き十分に看客の同情をよせようと仕組んだのだらうけれども、あまりにも間延びしている感を抱かせる。事件がなれば解決し、あとは勘十郎が白状すれば、万事解決となるところまで進行しながら、なか／＼勘十郎に白状させない。清十郎と勘十郎の、たいして意味をなさない会話を含ませたりして、少々だれ気味な感を与えるのである。大詰めになつて、それこそ幕が降りる寸前に代官職の機知にだまされて、勘十郎が白状する。これで勘十郎は骨の髄から悪人であるという印象を看客に植えつけ、一方「妄執も晴れつゝ、清き清十郎、臨終顔も菩薩の数、二十五歳の命は消えて浮名は今に残りける……」と笑いのうちに清十郎の成仏、お夏の出家となつてゐる。大詰の事解決の場において、登場人物全員を揃えてめでたし／＼で終つてゐるところは、今だに歌舞伎の域から脱しきれずにゐる名残りがみられる。

(枚数の関係上、第一章第四節勘当の場面、狂乱の場面、殺し

の場面、第二章、民間における「お夏清十郎物語」、第三章、第五節登場人物の想定、第六節、「おなつ清十郎五十年忌歌念仏」の位置、第四章、結び、は省略した。)

高浜虚子研究

——俳句から小説への道——

本 田 絃 子

以下は、39年度提出の、国文学科卒業論文の抄である。論文の性質上(実証研究であるため)まとめる事は困難で、あれも、これも、と整理がついてない感じもする。

大筋を辿つただけであること故、自分でも不満足なものとなつた。不明瞭な点は、研究室で、製本されたものを読み直していただくと思う。

1 研究対象の紹介

小説家としての虚子研究は、今迄盲点とされてきた。それは、虚子研究が主に俳壇内でなされてきた事、稀に小説家として研究されても、漱石の陰になり勝ちであつた事が理由である。虚子が小説家へ移行する動機、道程を実証する事をテーマとした。

虚子は、級友碧梧桐を介し子規に文通したのが俳句への機縁となり、二人は子規門の双壁と云われた。子規没後俳壇がこの二人に二分された感があつた。大勢は新傾向(碧梧桐)へ移行せんとしていた。明治40年前後から虚子は俳句を遠ざかり、写生文に没頭し小説に筆を染めた。しかるに、碧梧桐が余りにも伝統から逸脱するを見かねて、大正初年俳壇に復帰した。

彼の主張は表現写生にあり、殊に花鳥諷詠を中心において、俳句を自然詩と限定した。これは、大衆への俳句普及に大いに役立った。70年の虚子の作句生活をふり返つてみると、大樹が育つてゆく様にゆつたりと緩漫な成長を見せている。俳人としての自覚、特殊文学としての俳句固有の方法と目的の中に生きた。又「ホトトギス」を東京で刊行し、編集、経営に當つた。俳句と云うものが一つの雑誌の上に纏まつて掲載せられ報道せられる様になつたのは、この本が初めてである。俳句八分、其の他二分位で編集したこの雑誌が写生文の運動を推進し、漱石の発表舞台となり、明治後期の文学運動に対して果たした役割は高く評価されてよいものである。

2 虚子の小説と文壇

先ず、虚子が小説を書いた周辺を眺める。明治40年「風流懺法」「大内旅館」等が出た。これは俳句の上の写生を

応用した写生文みたいなものとも言え、形式上俳句のやり方を真似ても、それを精密に書ける点で彼は魅力を感じていた。事件の面白さと云うより、事柄の奥に潜む面白さ、換言すると深い本質的な面白味に着眼したのである。虚子著の文集『鶏頭』の長序で漱石が批評している。それが「余裕ある小説」で「ホトトギス」に拠る人々の創作態度を示している。虚子自身の言葉を以てすると、「…写生文が小説と云う様な形になり始めたのは『風流懺法』『斑鳩物語』『大内旅館』等でした。写生文と小説は、本来書き方の違つたものであるにも係らず、両者が一致する場合もあり、その例が『大内旅館』『三畳と四畳半』である。」と云う事である。虚子等の俳諧派の動きは文壇からも注目されつつ勢力を増して来たし、自然主義派と勢力を二分する程の勢いを示し、文壇の大きな潮流となつた。虚子は「従来の日本文に懐かないのと、俳句に試みる如き写生を文学上に試みたら何らかの効果があるだろうと云う自信から写生文は生まれた。… 写生文の内容は俳諧思想に限られてゐる。」と云つてゐる。この派が、当時一般の注意を惹起したのは一種清新の風味を文壇に与えたからである。周辺の意見を眺めてみると、「…冗漫な描写を避け、簡潔に大膽を以てして、今迄の千篇一律な形式を打破しようとして居るのは頗る喜ばしい。」「ホトトギス派の文人」では「写生文は興味も感じしも、作者の一人台点に止

り、読者に感興を起させる力が乏しい。散漫なる叙事であつて中心思想がないからである。ホトトギス派の文人の作品は、超然として人生の苦痛や煩悶を遺却し去らしめる所がある。どこまでも楽天的で、悪く云へば人生を茶化している気味がある。」等と云われている。

虚子を俳句から小説にかり立てたもの―第一に、文学への出発に際し広い文学小説に魅力を感じていた事、散文的資質を有していて何とはなしに文学が好きであつた事、第二に花鳥諷詠の自然を描く句の外に、人間関係と云う物、人事を自由に書いてみたい。と云う希望を持っていた事―が挙げられる。

3 本論

虚子は、伊予尋常中学で碧梧桐を知つたが、彼から、話に「子規が東京で文学を研究し、殊に俳句を作つてゐる事」を聞き、文通を求めた。それ以来、頻繁に手紙が往復した。初対面の印象を虚子は「兄事すべき人だと言ふ心持はしたが、会つてみると特別際立つて教を受ける事もなかつた。」と云つてゐる。子規の試験準備は、小説書きの為に邪魔され、その結果は落第となり、退学の決心を早めるのである。その頃虚子は、京都に移り、子規の様子を人の話に聞いたり、手紙の模様で想像していた。明治27年二月「小日本」が生まれ、子規はその編輯長とでもいつた地位

にいて力を尽していた。そうして文学とか、他の職業とか云う区別でなく、何でも自分の目前に現われた仕事には、忠実に従事する抱負を持つていた。子規は、「人間よりも花鳥の方が好きだ」と云つた事があつたが小説よりも俳句の方が自分に適していると云う意味であつたかもしれな

い。

子規は、連句は文学に非ず、と云う考えをもつていた。虚子はそうではなかつた。子規在世中の虚子の、連句への関心が子規没後の連句論を導くのである。虚子は、「連句は変化を尊ぶので、縦横自在に変化した詩境を見出さねばならぬ。従つて変化少ない天然より、変化多い人事を詠ずるに適している。」と云つて居り、連句に素材の方から見た処の人事趣味と、制作に當つての変化(自由)を見出した故に関心を示す様になつて来たと思われる。ここで人事と云うのは、風景として切り取られた人間生活の万般、と云う事である。又虚子は、「田舎は人間の分量が少く天然の分量が多い事、即ち天然趣味である。複雑で裏面的である人事趣味に対して遙に単純で表面的である。」と云う。田舎は天然趣味が充満して、又天然に近い人事趣味も多い事を力説している。それで、俳句が天然界を詠ずるもので田舎者に最も適したものと考え、俳句の方へ向かい、更に写生を試み、写生文に移つたのである。虚子は、徐々に、人事を詠み得て、変化ある表現を使える連句に目をつ

け、研究心が起つて来ていたのだつた。と云うのはやはり、彼が人事に興味を持つていた事を物語る。しかし、先にも述べた様にその連句は恩師子規が、否定していた為、子規生存中は関心を示していたに止まつたのである。その頃、碧虚の傾向の相違は明らかになり始め、二人の対立は、子規の死後数年にして遂に相携えた袂が分たれるに至つた。兩者の対立を最初に明らかにしたのは「温泉百句」であつた。

ここで、子規と虚子の俳句観をのべる。子規の場合「写生」と云う言葉を逃す訳にはいかない。絵画にも俳句にも小説文に於ても力説している。「写生は平淡である代りに仕損ひはない。」と云うのである。複雑な事物は小説とか韻文とかに適していて、単純な事物を俳句とか短い韻文に表わすのがよいとも考えていた。まとめてみると、一、俳句を簡単な思想的にするには絵画的にしたらよい。二、俳句は簡単な思想を表わすのが適當で天然の方により多くの材を見出す事が適している。三、複雑な要素であつても、その中から最も文学的、俳句的なる要素を抜いてきて十七字におさめたら俳句になる、と云う所であろう。写生尊重と單純な内容、天然を写す態度を虚子は受けついでいつた。虚子が俳句をどう考えていたかと云うことになる。対象を十七字に捕えるのが俳句である。引字が和歌でなく十七字が俳句ではない。天地山川和歌であり俳句である。：実景写

生こそ大事である。」等云つている。天然自然を客観的に読み乍ら、広い世間の詩壇に於て類ない唯一つの短詩形で甚だ珍とすべきと誇りにしていた。「俳句における人事趣味」と云う題の文では人事への関心も見せていた。「時間的に延びんと傾く人事を僅に十七字で云うのは無理だ。しかし、十七字の人事物も捨つべきではない。」と云う事である。「十七字詩は時間を写すに利あらず、又主観を描くに適せず。」「俳人とは十七字詩人なり。故に十七字詩に恰好なる詩想を涵養す。その觀察する所も亦多くは十七字に歌うに恰好なる天地なり。」と云う。子規の虚子評に「虚子は熱き事火の如し：虚子の草木を見るは狎有情の人間を見るが如し：虚子は厚く志し深く思ひ、孜孜として勉め、遅々として進む者なり。」と云うのがある。結局虚子は、人事よりも天然を俳句の素材と考えていたと云う事が出来る。俳句に適した内容、わくと云うものを持つていて、そして、それに対して不自由を感じていたのである。以上二人の俳句観だつたが、天然を写す態度が俳句に於て必要である、と云う言葉の裏に、特に虚子は人事を自在に扱う事のむつかしさを発見した。人事のむつかしさを表現するに、俳句では不可能に近いと云う事がわかつた虚子は、連句に目をつけ始めるのである。

虚子の連句論

明治37年9月「ホトトギス」に発表されたものだが「俳

句復興以後、連句の方は全く文学社会に忘却されて、之を一顧するものもない。」と嘆く所から始まり「諸君が連句の価値を如何に定むるかを聞かんと欲するのである。」と云う。「子規子曰く『連俳に尊ぶ所は変化也。変化は文学以外の分子なり。』と。しかし、文学の目的が人生を描いて人に面白く読ませるのにあるなら、面白い小説も文学、面白い連句も文学である。」と駁している。連句は、虚子によると、人間を写す短詩として俳句以外に一特色を保有している。連句中の或一句は其前後の句の助けをかりて一雑の句をみるより遙に多大の感興を起すそうである。若し連句中の一二句を取つて之を俳句にしたら、俗悪見るに堪えぬものも連句の中に挿まつていると、自ら品位を有しているといひ一説を提示している。それは「嘗て連句の発句が独立して俳句となつた様に、連句の二句を独立させて一詩体とする事」でこれ亦、短詩形人事詩の一つの發展であると言ふ見方をしてゐる。この様に人事を共に変化と自由を連句で扱う事を主張し、独自の連句論と云うものを公にしてゐる。連句は、小説が描く様な人の運命―事件の葛藤が問題になるんじやなく断面をみる事だと云うこと。文学の目的が人生を描く所にあるなら連句も文学だ。連句は人生を詠ずる恰好の詩型だ。連句を独立させ、新体詩界に一新体詩を始めるもよい。と云う様な事であろう。又、連句は文学界に例がないから文学とし難いと云う人がいる

が、寧ろ他に例がないと云う事が、連句其のものの一つの価値である。斯の如き文学を有する日本文学は以て誇とすべきであるとも云つてゐる。

連句論から俳体詩論へ

連句論はどんな形で時代を追つて進んだか。連句論として詳細に論じた虚子であるが、「俳体詩論」と云う題の文を出している。(明治37年10月「ホトトギス」)これは「古人は偶然にも三句、又は四句連続のものを作つてゐる。其の連続のものとして解釈する上に多少の支障があるのは、元来、古人が連続するものと云う考えで作らなかつたからである。：今後の作者で三句四句連続のものを作る事は決して大難事ではない。三句以上意味の連続するものは、之を仮に俳体詩と呼ばんか。」といつてゐる。

この様に三句四句に一貫した意味を持つ連句を提唱し、試みとして漱石と二人でその俳体詩なるものを作つてゐるが、ここでは割愛させていただく。明治37年の10月12月号「ホトトギス」に發表されてゐる。整然とした連想の展開が表現され、閑寂で感覺的視覚的印象が強調されたりしてゐる。連想力はたくましく、印象はかなりはつきり、明瞭に読者に伝えられてゐる。しかし二人共多忙の為、折角の俳体詩も一応ここ迄で作らなくなつて来た。

明治3940年は自然主義派と並んで写生文脈(余裕派)が

目立つた時期である。しかも、一定の状態に止まる事なく、写生文自体も、文壇全体の動きに影響された時期である。

虚子は写生文に於ても、従来の所謂俳諧趣味に満足出来なくなり、主観的写生文をとくとき、人間研究に一つの進路を求めようとしている事が伺われる。虚子の、この様な考えにも係わらず、作られた作品は全体として見れば、人間の内面に深く立入るといつたものでなく、俳諧趣味の域を脱したとは云えなかつた。「風流懺法」は彼に云わせると写生的小説とでも云うべきか、と云っている。「写生文と言へば、何か特別なものがある様に思はれるが、写生を忽にした文学はない：写生文は俳諧思想の上のみ立つた文学である。写生文に従事する者の態度は、客観的描写を重んずる事に變りはない。」と。

以上が連句論から、俳諧趣味を基礎に写生する方法に到達し、俳体詩論を足場に小文章の道を辿つて小説の方向へ足を向けた様子である。

ここで漱石との関係について一言触れる。漱石は子規と親友で又、句友でもあつた。英国留学から帰り、ノイローゼ気味の漱石に、気晴らしに文章を書くことを勧めた虚子は出来上つた文章に大いに興味を持たされた。文章会（山會）の席上それを読んだ処、仲々面白く異色あつたので明治38年一月号「ホトトギス」に発表した。その雑誌は大変

な反響を起し、それが為には漱石は生活が一転化し、気分が一転化する様になつて来た。それから後の漱石は社会的にも、作家的地位を確立し、有名になり、やがて朝日新聞社に籍をおき、従つて大学の教師はやめる事になつた。一人これが漱石の身上に変化を起した事は仲間も刺激を受け、皆一様に文章熱が高まつて来た。虚子は、漱石に勧めて書かせ乍ら、却つて刺激されて長いものを書いてみる氣になつたと云う傾きが出て来た。目前に漱石の作家的成功を見ていた虚子が、そういう氣になつたのは、極めて当然な成行きであつた。漱石は、虚子の書く小説等には、常に眼を通して、好意ある批評を絶えず送つて激励する事を怠たらなかつた。虚子は、「その点私は最も徳として居ります。」と云っている。

漱石が、一番虚子に密接な関係を持つたのは、この時代であつたと云つてもよい。そうこうしているうちに、虚子の小説家たらんとしている様が浮かび上つてくるのである。ここでは、外的要素、主として漱石の作家的成功を目のあたりにみた虚子を述べた。前述の内的要因と組み合わせられて、小説家へ、と道を踏み出したのである。それが「風流懺法」成立の様子である。

4 むすび

今迄の事を整理して行つてみると、文学青年虚子は、碧梧桐を友人に、子規を先輩に持ち、学業の傍ら俳句の手は

どきを受けていた。虚子が高校時代に子規の学業放擲を見る。文学者になるのに、学校に無理に行かなくてもよいと考え、文学への強い憧れの為、学業に留まらずに退学。上京してしまつた。

子規は大学中退後活躍して、是に強く刺激された。当時の虚子は、広く文学を志して居り、上野道灌山で、病人子規に俳句の後継者たるを強いられたにも係わらず、辞退したのは、その為かと思われる。子規は其の後、日清戦争に従軍、船中で咯血し須磨で療養、松山に帰臥、漱石と同宿した。

松山で松風会と言う俳句会が出来、ホトトギスと云う会誌が発行された。第二十号まで行つたが、経営不振でそれきりになつた。

帰省の虚子はこれを継承し、発行所を東京に移し、広く文学雑誌として出発、子規も、その出来栄えに満足を示した。子規は写生を説き蕪村を説いた。虚子はその頃、写生に疑問を持ち、理想美に思いを馳せ、子規没後は益々一句の調和を重んじた。この頃から、碧梧桐と対立していつたのである。

「山会」と言う会では、写生の方法を文章に見出そう、そして、文章に一つの山を盛つた小文を書こうと言う目標の下に、子規の弟子等が写生に勤しんだ。写生の方法で：と、研究し合つたのであるが、

「自分は小説を書こうと云う考えがあつて、写生文は単にその下準備のつもりでやつて来たから、画家がデッサンの修業の後、油絵にかゝると同様、必ず本当のものが出来ると信ずる。」と云つていた。

もともと虚子等が、俳句を研究するに至つたのは、単に俳句を作るのみの目的ではなかつた。子規等も、最初は小説を書く積りであつたが、小説に筆を執る事は出来なかつた。理由は田舎者だつた為である。俳句は、天然界を詠ずるので、田舎者に適していると云う訳で、その道を歩いていた訳である。併し、一度は、小説に志したものであるから、内々では小説を読み、批評し、時には作つてみた事等もあり、虚子の内部で、周囲の事情とは無関係に、小説を書く気運が熟しつゝあつたらしい事は認められる。

虚子は、人事よりも天然を写すのが俳句に適していると考え、それと共に、人事へも関心を持つて、俳句ではいい表わせない所に、不自由を感じていたのであつた。この俳句観は、写生尊重と共に、子規から貰つた財産であつた。そんな虚子が目をつけたのが、連句の世界であつた。それは、連句に、人事と変化を見出したからである。

子規の影響から抜け出せない間、連句への関心も、徒に表面に出せなかつた。と云うのは、大先輩子規が連句を否定していたからである。しかし、子規没後大つびらに連句論をぶちまけ、人事と変化(自由)を扱う様に推進した。

連句が、古の殻を冠つて、近代的に脱皮するのが難しいなら……と考へた彼は、連句論から、一新体詩である俳体詩の創作に情熱を傾け、俳体詩論をブツた。それは俳諧趣味を基にして写生すると言う考へ方であつた。その俳味は「非情熱趣味、微温湯趣味」等と呼んでいた。

そこで彼は漱石を引つ張り出して俳体詩を作つた。理論の実践化である。俳体詩の制作も三ヶ月程で終り、漱石は、気分転換に書いた文章が「ホトトギス」で好評を得、文章に興味を持ち、大学教授をやめてしまつた。虚子も多忙で活動が出来なかつた。

「写生文に於ては遙かに漱石の先輩を以て任じていた私達も、大河を決するが如き、漱石の多年の蘊蓄を一時に傾け尽した創作熱には、非常な刺激を受けたのだつた。」と虚子は述懐している。その漱石は、三重吉宛の書簡の中に、「僕は維新の志士の如き烈しい精神で文学をやつてみたい。」と語りかけている。

ここで初期に小説家の夢を描いていた虚子は、俳句のとり上げる世界の狭さを自覚していたし、変化と自在を希求していたし、前述の漱石等の動き、特にその成功を目のあたりに見た事もあつて、内面的な衝動に加えて、直接的な刺激を受けて、小説家たる事が実現したものと云える。



の様な道筋になると言える。「風流饑法」「大内旅館」等は、その道を辿つて出来上つた小説であつた。漱石の評にもある如く、虚子の小説は、俳諧趣味の、せつばつまらな特色を持つていた。

結局、虚子の小説は、子規の規定した所の俳句の特性を承けて、それを虚子風に展開し、自然主義文学と対峙する性質の小説として文学史的位位置を勝ち得たものであつた。

虚子の俳句から小説への道、それが、どの様な歴史的展開を辿り、どの様な文学的理由によつたかは以上の如くであつた。

川端康成の文体

！ 文章、心理学による統計的考察！

磨井 美穂子

はじめに

「心理学は、人間の精神を探究する学問である。そして、文学は、人間の精神によつてうみだされたものである。」といわれるように文学が、心理学の対象になりうることは、明らかである。